

知財の伝承

原 藤 和 敬*



最近では知財による技術立国ということが盛んにいわれ、『知財』という言葉もすっかり普及してきたように思う。当社の特許部も今年4月から知財部と名前を変えて、新装オープンしている。企業の中に身を置く知財部は、戦略や各種権利に伴う係争の処理など、まさにビジネスの戦いの真っ只中にある。しかし、知財を広く考えれば、人類のこれまでの営々とした技術や文化の歴史は、全て人々の英知で築いてきたものであり、これらの歴史は知財のかたまりと見ることが出来る。

当社には、鋼の精密鑄造をロストワックス法で行っている部門がある。昔、この技術が米国からもたらされたとき、米国の会社は特許を申請したが、特許庁は『わが国は古来仏像をロストワックス法で作った』として、申請を却下したという話が伝えられている。

鉄づくりについていえば、先ごろ放送されたプロジェクトXの『たたら』は、大型のてんびんふいごの発明により効率が改善された、江戸時代の技術を踏襲したものである。それ以前の製鉄方法はもっと原始的なものであったらしい。こうして得た鉄を用いて刀を作る職人は武器の製作技術者として、江戸時代には諸職職人番付で横綱にランクされている。ところでこの刀を作る技術は、『正宗』が有名のように、鎌倉時代に最高の時期があったとされており、それ以降技術的には衰退とはいえないものの、多くの刀工達が『正宗』を目標に研鑽努力を続けてきたといわれている。つまり、刀の製造に関する鎌倉時代の知財は維持されなかったことになる。

刀の技術的意味をもう少し述べてみたい。歴史的に有名な本阿弥光悦は、刀鑑定の家元の家系の出身であるが、これらプロの鑑定家達は刀の姿形、焼刃状態、表面の鉄味を観察することにより、時代や名前、本物か贋物かをぴたりと当てることが出来る。刀の製造というのは、鉄としての純度は高いがノロが含まれたり炭素のバラツク当時の素材を、鍛錬によって夾雑物を除くと共に、炭素を最適値である0.6%近傍に調節し、焼入れによって仕上げる工程によっている。従って、刀本来の目的である折れず曲らずよく切れる状態を得るための工程の組み合わせは千差万別である。備前や鎌倉など、夫々の地方で入手可能な素材をベースに、時代やグループ毎にノウハウを共有し、師匠から弟子に『知財』の伝授が行われたとされている。父から子への一子相伝であったかもしれない。上述した鑑定家達はこれを鑑るわけである。

天田昭次さんは人間国宝に認定された、現代最高の刀工のお一人であるが、昨年『鉄と日本刀』という興味ある本を上梓されている。天田さんも鎌倉時代の名刀を目指して65年作刀に打ち込んでこられた。特に鉄の素材を重要視され、自分の工房で小型の『たたら』を築炉して実験を繰返し、最終的

* 日立金属株式会社 執行役常務技術企画センター長 Kazunori HARATOH

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

には小型反射炉による銑鉄の精錬に独自の境地を開拓されてきた。その過程は著書に詳しいが所謂職人的な技能の世界に、工学的な技術を加えたものであり、まさに知財の積み重ねと感嘆に値するものといえる。天田さんは、到達された技術の公開も惜しまず行われたり、求められて小学校での製鉄実験の援助などもされてきた。現在話題となっている知財に関する権利の主張や管理とは別の、教育という観点からの話である。

知財による技術立国を掲げる中で、子供達の理科離れが心配されている。子供の天動説や地動説の認識の議論もにぎやかである。今回この拙文を依頼されたのにあたり、私も最近の新聞報道を注意してみてきたが、子供達の理科離れの対策は、色々と模索されているようである。

中学校の教科書で脱ゆとりの見直しがされたり、理科を教える先生にも最先端技術の再教育を行ったり、科学技術分野の人材育成を目的にしたスーパーサイエンスハイスクール活動等である。将来の知財による技術立国を支える子供達を鍛えることが、国民運動のような広がりとなり、次代を担う人材が輩出されることを願って止まないが、私たちには、『切磋琢磨して名刀を鍛える』ことに価値を見出してきたという、ものづくりの精神文化が脈々と生き続けていることを信じたい。

